

東太平洋海洋学会議（EPOC）と新海況通報

誌名	水産海洋研究会報
ISSN	03889149
著者名	宇田,道隆
発行元	水産海洋研究会
巻/号	8号
掲載ページ	p. 98-99
発行年月	1966年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



デ岬諸島沖重要漁獲対象となつてきた。主に欧州人のやつて来たこの漁業の重要性が急に増して来た。モロッコ産ふつうのスパイニイロブスター (Palinurus Vulgaris), リオ・デ・オロヘケーブヴェルデ諸島方面のグリーン・スパイニイロブスター (Palinurus regjus), ピンクスパイニイロブスター (Palinurus mauritanicus) からなる漁獲物である。その後漁業はトロールでとれるピンクスパイニイロブスターに集中した。(Vinceut - Cuaz, 1958)。現在は乱獲が明瞭に現われており、その結果漁獲が減少している。一方他の種類の漁業が発表し、クルマエビのトロール漁業がギネア湾に起つた (Penaeus duorarum, Penaeus keraturus, Parapaeopsis atlantis 等)。近年多くの機関又はローカル研究所は漁業の問題を研究しておる。ポルトガルの "Centre de Biologie des Pêches du Conseil d' Otre Mer" はケーブ・ヴェルデ諸島、ポルトガル領ギネア、サオトーム及びアンナボン諸島近海を調査 1950年から WAFRI (西阿漁業研究所、フリータウン) がガムビア、シエラレオン、ガーナ、ナイゼリアの漁業を研究、Institut Fran,cais d' Afrique Noire はフランス語を話す諸国沿岸の漁業を研究した。最近 "アフリカ連合機構" の CCTA もこの領域の仕事をしている (1964年ギネア湾トロール漁業共同調査GTS)。

結 論

- 1) 魚類、甲殻類、軟体動物の多くの詳細な文書が動物群領域で見られる。次の段階は深度別地理的分布と共にまちがいない魚種のリストをつくるのが緊急に必要となつている。
- 2) 熱帯魚種の生物学に関して大量にとれる魚類、甲殻類についてすら未だ極めて断片的である。特にイワシ類、マグロ類、Carangoids 及び色々の深海魚 (lutjanids, Pristipomids, Serranoids) に関する作業プランを練る必要がある。
- 3) 海底の性状と生物学的特性を示す漁場図を発行すべきである。この仕事はすぐにもスタートでき、既に手元にある情報に基いてやれる。
- 4) ちがつた海域の漁業状態と使用漁法の調査は実際すこぶる有用である。それがストックの開発を確実にし、少なくとも底魚に関する限り導入が必要と思われる。資源保存の手段に関する提案に導くであろう。

以上は遠大な計画だが、その決勝点に達することができるにちがいを。アフリカの将来漁業の重要性がこの計画の実現を正当化する。その一歩として、取扱う問題の優先度の順を定め、その使用する方法について合意に達するようにする必要があるだろう。またそれは国際的特別会議中で、ICESの枠内で、なされ得るだろう。(宇田 道隆)

10 東太平洋海洋学会議 (EPOC) と新海況通報

1965年9月29日~10月1日、米国加州レイクアローヘッド

- 1) 海洋学データの無電通報 海上研究船から海岸局へ気象 XBT, STD データの迅速通報のため水産庁鮪資源研究所は特定無線周波数をスクリプス海洋研究所構内の水産庁無線局で使用のため申請し (ODS 周波数 16500, 12400, 8200, 6200 KJ/S バンド)、試験をマトソン航

路貨物船カリフォルニアン号との間に行なう。実験が成功すればODS収集局をホノルル、シャトル、サンディゴ、ガルフコースト、マイアミ、グロセスター又はウツホルの6カ所におく。米海軍気象業務環境予報システムとデータフォーリンクスを通じてつなぎ、総海況資料を数隊数値気象施設(モントレイ)の電子計算機などに“リアル・タイム”中に到達させる。船舶からの機能的資料報告システム実施は半一又は全自動観測十進数化機の開発にかゝり、それにより船員の海洋観測実施、記録伝達の労を最小にできる。シャトル水産研究所ではブイ(漂流)からのデータ取得に4 meg (4134.5KC)データチャンネルを18カ月間用いた。オレゴン大学及びワシントン大学海洋学部の計画のブイ実験に協力、このチャンネルをデータ回収に用いた。スタンフォード大学内にある水産庁水産研究所では商船、漁船、海洋調査船からのBT又はXBTデータ通報に関し、商船カリフォルニアン号上でXBT系はアナログトレースに加えてテレタイプ設備を用いデジタルプリントアウトをもつなどのべた。1964年5月連邦通信委員会の海洋学資料業務(ODS)用オ1回無電周波数割当は、4133-4136.5KC/S; 6200.5-6204C/S; 8265-8268.5KC/S; 12400-12403.5KC/S; 16530-16533.5KC/S; 22070-22073.5C/S。

2) 海洋データの機械処理

ネクトン資料の機械貯蔵(machine storage)を進めているが、データ報告の蓄積だけで標準貯蔵形式は未定。小委をつくる。投棄式BT、現場サリノメーターのような時空的に高密度サンプリングのできる器械のデータについて機械処理貯蔵法を開発する。中間的にアナログ記録及びデジタル記録のコピーをNODCに全研究所(この種現場測器使用)から出すこと。

3) EASTROPAC (東熱帯太平洋共同調査1966年7月1日~'67年6月30日)は1967会計年度予算計上。米海水産庁が特に力を入れている。

4) 米国オ89議会海洋学立法 海洋学審議会(Oceanographic Council)は宇宙審議会水資源審議会にちなんで設けられた。シー・グラント・カレッジ創設決定。

5) 太平洋風観測と大洋水洋構造解析予報 1° 升目観測回数、平均風速、平均東西成分、南北成分合成風速と風向、風応力、持続度、応力カール(渦度)。モントレイ艦隊数値気象隊では表面水温混合深度、ウネリ、風浪の毎日解析、予報をしている。400m深までの水温構造についての調査をテスト中である。BT観測データ不足のため、大気海洋相互関係から出すモデル開発。北半球100、200、300、400フィート深の月別平均水温図(及び標準偏差)作業中。600、800、1200フィート深のも希望されている。同様の南半球でも入用とされている。

(宇田 道隆)

11 サンゴ海のジンベエ鯨付鯨群を手釣

昭和40年12月初旬サンゴ海(16°S, 146°E附近)でマグロ延縄漁船が操業中、ジンベエ鯨付のキハダ、メバチのマグロ群を発見、各船投縄で手釣りを行なつたところ好漁獲を得た。その状況について聞取つた話を集めた。もつと詳細に陸上調査すればよかつたが、各船が年末入港をして出港あるいは三崎以外の港に入港などの点で正確なことはわからない。また船の乗組以外の人すなわち問屋、市場、会社の人たちから聞いた点もある。いづれ近い中に正確な操業位置、日付、